

端島と黒島

岩国市教育委員会

(表紙写真)
端島あしだれの浜

刊行にあたって

柱島群島は岩国市中心部より南東の沖にある有人島3島、無人島9島の計12島で構成される島々です。瀬戸内海中にあるこれらの島々は岩国地域のほか愛媛や広島など様々な地域と交流しながら島の歴史や文化を育んできました。ただ、島という地勢的な状況により、記録として残らないところが多く、明らかになっている部分は断片的です。

近年、人口減少や高齢化が進んできており、島独自の歴史や暮らし、習慣などの記憶が薄れてきています。本書は島の記録や記憶をとどめておこうと思い作成した冊子です。この冊子が多くの方々目に触れ、柱島群島の島々のことに思いをめぐらせていただければ幸いです。

目次

I 端島の位置と環境	1
II 端島の文化	2
1 端島の歴史	2
2 端島の生業	4
3 端島の民俗	9
III 黒島の位置と環境	11
IV 黒島の文化	12
1 黒島の歴史	12
2 黒島の生業	14
3 黒島の民俗	17

I 端島の位置と環境

端島は安芸灘の南西に位置する柱島群島の有人島の一つで、本島である柱島の北西に位置している。島の地形は北側にタコウ山、南側に見壁山みかべやまと呼ばれる山があり、山と山を繋ぐ島の中央部の両側が湾となり南北の山を繋ぐよう低地となっている。島の地質は片麻状花崗閃緑岩へんまじょうかこうせんりよくがんで構成されており、低地部分は沖積層となっている。元々は二つの島であったのではないかと見られる。

島の集落は東側の浜辺にのみ展開する一島一集落の集落形態をとり、西側の「あしだれ」と呼ばれる浜には集落はなく、以前はイリコの加工場や倉庫が存在していた。

端島の人口は平成28年4月1日現在で25人。公共交通は高速艇で岩国港から約50分で到着出来る。



(図1) 端島の位置



(写真1) 端島港。奥に見える山は島の南にそびえる見壁山である。



(写真2) 端島の集落。島の東側の湾に沿って住居が立地して集落を形成している。

II 端島の文化

1 端島の歴史

端島が史料にあらわれるのは江戸時代の地誌である『玖珂郡志』や『村記』に「端島ハ安宅又右エ門開也。」とあるのみでいつの時期に人が住みはじめたのかはわからない。また、柱島からなのか、他の地域からの移住かもよく分かっていない。

ただ、島の北側の沖には端島海底遺跡があり、古墳時代（約1700年～1300年前）の壺が採集されている。しかし、調査がおこなわれていないので遺跡の状況は不明である。

近世は柱島とともに岩国藩の行政区分のひとつ、由宇組に属し、寛文8（1688）年の『村記』には家が5軒、石高は75石6斗1升8合に定められ、石高の約8割、約58石が畑であった。享保年間の『村記』には享保12（1800）年の時点で家が23軒に増えている。石高については見直しがなされ、享保9（1800）年には55石9斗1升2合となり、そのうち畑が約44石で石高の比率としては寛文8年のものと変わらないようである。寛文期で5軒という家の数を考えると端島への定住は中世末から近世初頭と考えられ、薪などの燃料資源、漁場の確保においても、漁業と畑作の島であったと見てよいと思われる。島の鎮守については荒神の祠から明神荒神社、明神社と変化しており、現在の端島神社へとつながっていく。



(写真4) 端島神社
拝殿の右奥には荒神の祠がある。

※岩国藩の正式な成立は慶応4年（1868）であるがここでは岩国藩として表記する。

端島海底遺跡の状況



(写真5) 端島の北東端の岩場の沖に遺跡はある
(岩国市教育委員会 2017年撮影)



(写真6) 遺跡付近の状況
(岩国市教育委員会 1997年撮影)



(写真7) 海底から揚がった古墳時代の土器（壺）
(岩国市教育委員会 1997年撮影)

2 端島の生業

端島のかつての生業の中心は漁業であり、大正 6 (1917) 年に書かれた防長新聞の記事^(※1)によると漁獲高は柱島 1500 円に対して端島は 3 倍以上の 5000 円の漁獲高があり、本島よりも漁村的性格の強い島であったことがわかる。

漁業のなかでもとくにイワシ漁、イリコ生産は盛んであったようである。また、昭和 30 年代にイワシ漁が衰退してくると、アジなどの他の魚やタコ壺漁へと転換していったようである。まずはイワシ漁とイリコ生産について紹介したい。

聞き取り調査によると、イワシ漁は島内に「中網」、「昭和網」、「新屋網」、「沖本網」の四つの網元が存在し、島の西側のあしだれの浜にそれぞれの網元がイリコを煮るためのカマドを置いた小屋と漁具と乾燥させたイリコを保管する倉庫を設けていた。イワシ漁は網元ごとで船団を組み、網を入れて引き上げた後、伝馬船に捕れたイワシを積み替え、あしだれの浜に揚げたという。その際にイワシがあまりにも多く捕れるため、船が浜に揚がるのを見計らって、島の東から島民^{さい}達が容器をもって捕れたイワシを分けてもらうという「菜もらい」という慣習が存在したようである。これは漁獲量の多さだけでなく、島民の中に利益分配と相互扶助の状況が垣間見えるのである。

イワシ漁の衰退後は、近海物の漁である。聞き取りではアジを捕り、漁の時間と市が開く時間と間隔が短い呉の市場に卸しており、仲買人の中には端島の網元が捕った魚を待ち構えて人がいたそうである。

そして、西の浜にあった小屋や倉庫は現在は、藪の中へと埋も

れているがカマドの一部やイリコを煮る鍋などが周囲に残されており、断片的ではあるが当時の様子を渡跡から伺うことが出来る。

※1 桜井風浪「柱島一名「鬼界ヶ島」の異俗」
(防長新聞大正六年九月)『岩国市史』史料編三 - 二所収



(写真8) 宮本常一撮影 (昭和36年8月26日) の島の西側、あしだれの浜にあったイリコ小屋。当時はイリコ漁が衰退してしまった時期にあたる。

(周防大島文化交流センター蔵)



(写真9) 宮本常一撮影 (昭和36年8月26日) のイリコを煮るカマド。カマドで煮る鍋は、四角のものや丸いものがあり、そこに獲れたイワシを入れていた。

(周防大島文化交流センター蔵)

かつてイリコ小屋があったあしだれの浜



(写真10) あしだれの浜、かつてイリコ小屋のあった所は雑木に覆われてしまっている。



(写真11) カマドの焚口。煉瓦づくりで半地下構造となっている。



(写真12) カマドの一部が水を溜める柵と考えられる。



(写真13) カマドの上部。丸くなっているところに鍋を置き、イワシを煮てイリコをつくっていた。



(写真14) イワシを煮る鍋。丸いもの（手前）と四角のもの（左奥）の2種類を使っていた。

タコ壺漁も端島の漁業を考える上で重要な漁である。聞き取りで話をした島の老人の話を紹介したい。その老人は現役で漁をしていた時に、どの壺がよく入るかを研究していたとのこと。他の島や集落でのタコ壺漁の聞き取り事例から考えると基本的にはタコ壺の優劣はなく地域によって、使用されるタコ壺のタイプは異なり、さらに各々が使いやすいように二次加工されていくことになるのである。ただ、端島のタコ壺漁の事例として考えるとロクロ目が明瞭な安芸津産のタコ壺での漁が効果的であったと結論づけていた。たしかに島に残るタコ壺は柱島、黒島に比べると種類が多いように見受けられた。ただ、現在は利便性が重要視されプラスチック製のタコ壺が端島でも主に使われているようである。陶器製は重く、割れやすいという欠点もあり、軽くて割れないプラスチックが端島をはじめ柱島群島の三島では主流となっている。



(写真15) 端島で使われているプラスチック製のタコ壺。軽くて割れないというメリットがあるが、フジツボなどを取る手間が陶器のものよりもある。

タコ壺漁の聞き取りであるが、昭和 30~40 年頃、漁場は安芸灘の北側、倉橋島や長島の沖であり、良い漁場を確保するために、深夜未明に端島から出港し、他の島や漁港からの船より、より良い漁場を確保するために早く漁場へと急ぎ、漁場に着くと約百個の壺を沈めて蛸が入るのを待ったという。当時は産卵期を狙って漁を行っていたため、タコのメスが入った壺には複数のオスが入った状態で引き揚げることが出来たので、壺の数よりタコの数のほうが多かった。とれたタコは呉の市場に卸していたとのことで、かなりの収入となったという。近年はタコの水揚げがあまり良くないようであるが、端島の生業の中心は漁業であることは今も変わらない状況である。



(写真16)



(写真17)



(写真18)



(写真19)

端島の蛸壺。柱島や黒島より、種類が多い。陶器製は末田窯（防府）、安芸津窯（呉）、樹脂製の形状をそのまま陶器製にしたものなどバラエティーに富んでいる。

3 端島の民俗

端島の民俗について、島でも様々な民俗的な事柄があるが、ここでは二つの行事について紹介したい。一つめは「お接待」である。毎年、弘法大師(空海)の命日にあたる旧暦の3月21日やこれに近い日曜日行われる行事で、大師堂などに巡拝する人々に飲食物等を供するもので、瀬戸内海の沿岸部や島々でよく行われている行事である。端島の場合は地藏堂に島民がお参りし、終了後に自分達で作ったささげ豆と一緒に炊いたご飯で握ったオニギリを頂いてお接待を受けるといふ流れで実施される。以前は青年部が準備を行い、実施していたとのことで賑やかな行事であったようである。「お接待」は普通、大師堂や観音堂などで行われることが多いが端島は地藏堂で行われるのが特徴である。

二つめは亥の子行事である。旧暦10月の最初の亥の日に行われる行事で昭和63(1988)年まで行われていた。島の中学生達が中心になって、自分達でなった藁紐で亥の子石をしばってポッテンとよばれる飾りつけを行う。子供達で役割を決め、氏神に参拝した後に亥の子大将と呼ばれる行事リーダーである中学生の音頭に合わせてみんなでポッテンを突きながら亥の子歌を歌うものである。



(写真20) 地藏堂。お接待の際には、この堂の地藏をお参りする。後の札には観音菩薩を宿していると書かれている。



(写真21) お接待のささげむすび



(写真22)亥の子行事の帳面。行事の準備、お金の遣り取り、人の割り振りなど多岐にわたっている。昭和 23(1947)年から平成元 (1989) までの記録が 3 冊のノートに書かれている。



(写真23)



(写真24)



(写真25)



(写真26)

昭和 40 年代に端島で行われた亥の子行事の写真
亥の子行事は島の子供達が少なくなりながらも、昭和 63 (1988) 年まで続けられていた。亥の子石は飾りつけられ、「ポッテン」と呼ばれていた。

Ⅲ 黒島の位置と環境

黒島も安芸灘の南西に位置する柱島群島の有人島の一つで、本島である柱島の西に位置している。島の地形は南側に檜山かしやまと呼ばれる山があり、北側へ向かってゆるやかに広がる島である。島の地質は主に片麻状花崗閃緑岩へんまじょうかこうせんりょくがんで構成されており、一部泥質縞状片麻岩が帯状に入った地層が確認出来る。

島の集落は端島と同じく東側の浜辺にのみ展開する一島一集落の集落形態をとっている。集落部分以外は岩場に囲まれた様相を呈した島でもある。

黒島の人口は平成 28 年 4 月 1 日現在で 15 人。公共交通は高速艇で岩国港から約 30 分で到着出来る。生業は主として漁業である。



(図2) 黒島の位置



(写真27)



(写真28) 黒島港。島の東側は元々は砂浜が広がっていたが、キジア台風以降、防波堤が整備された。

IV 黒島の文化

1 黒島の歴史

黒島は江戸時代の地誌である『玖珂郡志』や『村記』が編纂されていた時期は無人島で『玖珂郡志』には「本島ノ者共、予州又ハ島中島辺ヨリ牛ノ子ヲ買来リ、此島ニ放置、三歳ノ時、他所ニモ売リ、自分ノ遣牛ニモスルナリ」とあり、柱島の人々が伊予（愛媛）の沿岸部や^{くつなしょとう}忽那諸島の中島から子牛を購入して、黒島で放牧を行い、牛が三歳になると柱島の島外で売ったり、家の耕作や運搬用に使っていたようである。黒島自体の記述としては『村記』には「根笹山也。」と書かれており、牛の放牧には適していたようである。

江戸時代の後半になると柱島、端島での人口が増加し、島民達は食糧や燃料の確保のためにも移住を藩に願っていたよう^{しよしょうもんちょう}で、諸証文帳には「柱島端島共、追々人数相増、分地罷出候之場相モ無之二付、柱十二島之内、黒島工人家田畠取立儀歎出、其分ニ被仰付候之事」とあり、人口の増加により分けられる土地や新たに拓く土地が島内に無くなったので、柱十二島のうち黒島の開拓を願ったものである。藩の許可を得て、柱島の庄



(写真29)
柱島から黒島への移住百五十年を記念して昭和55(1980)年に建てられた碑。

屋であった中富家の下、文政13(天保元)(1830)年に柱島から16人の移住が開始された。中富家の文書には以下のような記述がある。

「柱島の内黒島年来草場山之処、去ル文政十三寅ノ年開方被仰付、柱島ヨリ拾六人お百姓仕候二付、私共懸り世話人ニ被仰付、其節歩取帳面図等相調置申候処其後天保十五午年お百姓之内八人ハ引方御断申出、残り八人に持分之田畠^{くじ}鬮取にして御渡方被付候…」とあり、16人の移住の後、天保5(1835)年には16人のうち8人が脱落し、残りの8人が開拓をすすめ、さらに後には4人の移住があり、12軒の定住がかたまったのである。当初は畠作と薪の採取が生業の中心であったが漁をおぼえ、暮らしを向上させていったのである。



(写真30) 宮本常一が書き写した中富文書にある黒島移住の記事(昭和30年代)

(周防大島文化交流センター蔵)

2 黒島の生業

黒島の生業の変化については民俗学者宮本常一（1907 - 81）が著作のなかで記している。とくに、宮本が強調しているのが、^{とちぎんぶん}土地均分と漁具の共同所有についてである。土地均分は島の農地が島民によって均等に分けられている状況で、開拓当初の貧しさを乗り切る方法でもあった。当初の貧しさについて、宮本は「生活の資を得るために、島民は松を伐って薪をつくり、それを船に積み、大島の久賀まで売りにいった。島には米はない。ムギの粥をすすり、サツマイモをたべての生活は体力も十分ではなかった。久賀まではようやくやっていっても、かえりにはもう船をこぐ力もなく、時には前後不覚となって、漂流するにまかせ、気がついてみたら、船は広い海のただ中を漂流していたこともあったという。『私の日本地図』4）」と克明に書き起こしている。



(写真31)



(写真32)

黒島の畑、最初の移住者8軒で島内各地の土地を平等に分けて島を開墾していった。



(写真33)

黒島では土地均分のほか、イワシ網を島で共同で持つことを行っている。このイワシ網での利益を平等に分け、さらにはもう一隻の網船の購入にも至っている。イワシ網についての聞き取りであるが、元々は2隻1組の網船を共同で所有していたが、もう1組の網船を久賀(周防大島)の造船所で造ってもらって「新網」の船とした。漁の道具も共有であり、島のイワシ小屋に網などをしまっていた。イワシは捕ったあと、各々の家でイリコとして加工し、細長い専用の袋に詰めたとのこと。イリコは仲買人が直接、島に来て買い取っていったという。イワシ網以外の船は島民が個々で所有し、その船で近海の魚を獲って市へ卸に行ったとのこと。タコ壺漁については、暇な時に行っていたようで、当時はイワシ漁で年中、操業する状況であった。調査の際、タコ壺の共同所有については聞けなかったが、島民の生活をイワシ漁によって豊かにしていたことが宮本の記述や聞き取りからわかるのである。



(写真34) 宮本常一が撮影した黒島の浜、四隻のイワシの網船が見える。二隻一組で操業する。奥の二隻が後から購入した「新網」の船である。これ以外の船は、島の個人で所有し、近海の魚などを獲っていた。(昭和36年8月26日)

(周防大島文化交流センター 蔵)

現在の黒島は細々とタコ漁など近海での漁やヒジキ漁などを行っており、農業については畑作で自給的なものに留まっている。



(写真35)イワシ網の倉庫、二つの網元ともこの倉庫に網などの漁具を収納していた。



(写真36)タコ壺。黒島は人口のわりには蛸壺の量が多い、陶器製のは末田窯（防府）がほとんどである。現在はプラスチック製のものを使っている。



(写真37)ヒジキを煮る鍋。ヒジキは野外で煮ている。



(写真38)ヒジキ干し。

3 黒島の民俗

黒島の民俗について、三島に共通する行事の一つとして、ここでは「お接待」を紹介したい。柱島、端島と同じく弘法大師の命日にあたる旧暦3月21日にあたる新暦の日、あるいは近い土曜に実施する行事である。基本的には黒島の集落内にある大師堂にお参りして、飲食等の接待を受けるものである。以前は島内の4ヶ所にある地藏堂も参拝のルートとして設定されていたようである。

柱島群島の「お接待」は人口減少のなかにおいても、維持されて来た行事であり、島民の信仰が篤いことを示す事象である。



(写真39)大師堂。黒島の鎮守である黒島神社の下にある。周辺には黒島神社をはじめ恵比寿社など信仰に伴う施設が集中している。



(写真40)大師堂の内部。室内には弘法大師像が安置されていて島民達の信仰の対象となっている。黒島は柱島の善立寺(浄土真宗)の檀家となっているが、大師信仰もずっと息づいている。



(写真41)



(写真42)



(写真43)



(写真44)



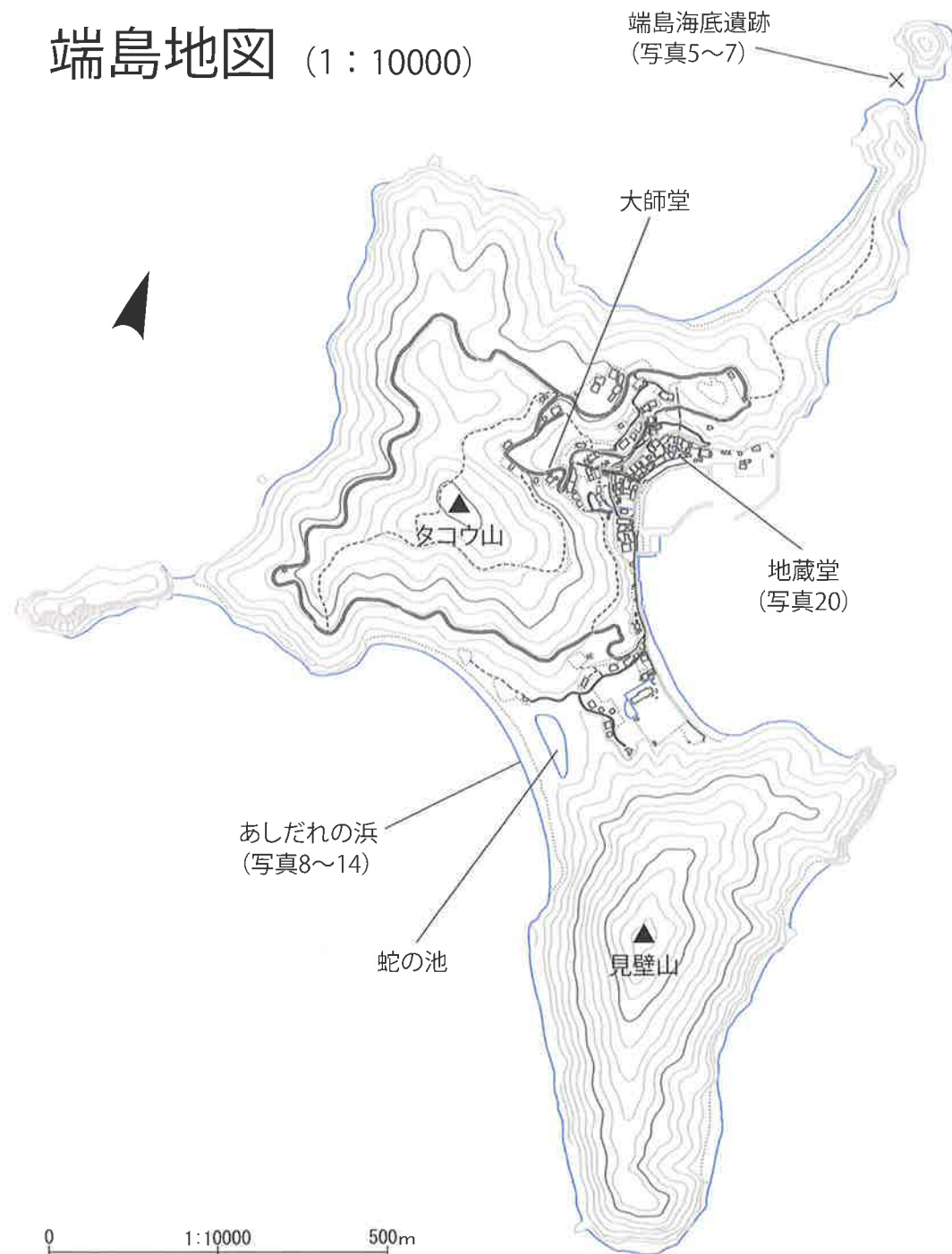
(写真45)



(写真46)

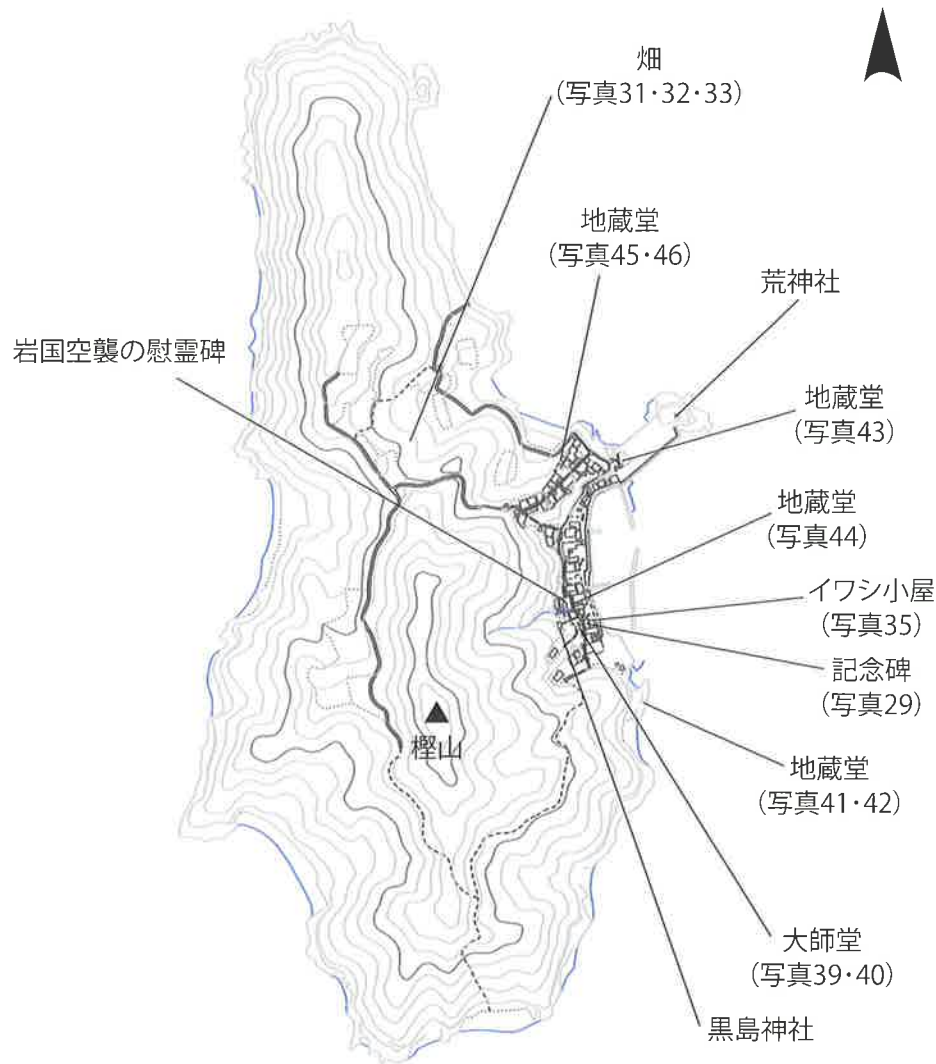
黒島島内でまつられている地蔵。以前はお接待の際にもお参りの対象となっていた。今でも、掃除やお供えなど信仰対象として大事にされている。

端島地図 (1:10000)



0 1:10000 500m

黒島地図 (1:10000)



参考文献

- 岩国市史編纂委員会『岩国市史 上』(岩国市役所 1970)
 岩国市史編纂委員会『岩国市史 下』(岩国市役所 1971)
 岩国市史編さん委員会『岩国市史 史料編三・二 近代 現代』(岩国市役所 2004)
 岩国市史編さん委員会『岩国市史 通史編二 近世』(岩国市役所 2014)
 岩国市史編纂所『岩国市史』(岩国市役所 1957)
 岩国市立黒島小・中学校『くろしま』(1994)
 岩国市立端島中学校『忘れじの母校』(1991)
 斎藤 潤「山口県端島・黒島」『しま』244 (日本離島センター 2016)
 奈良本辰也 三坂圭治編『山口県の地名』(平凡社 1980)
 広瀬喜運 桂芳樹校訂『玖珂郡志』(マツノ書店 1975)
 藤田慎一「宮本常一写真を読む その7 柱島群島(山口県岩国市)前篇」
 『しま』248 (日本離島センター 2017)
 宮田伊津美編『享保増補 村記』(岩国徴古館 1989)
 宮本常一『瀬戸内海の研究』(未来社 1965)
 宮本常一『私の日本地図 4 瀬戸内海I 広島湾付近』(未来社 1970 2014再版)

- 1 本書は岩国市地域づくり支援事業のうち地域資源活性化事業で作成した冊子『柱島群島ライブラリー2端島と黒島』である。
- 2 本書の作成にあたっては端島、黒島の住民の方々をはじめ、以下の方々からのご教示、ご協力を得た、記して感謝したい。(敬称略 五十音順)
 金谷匡人、周防大島文化交流センター(宮本記念館)、高木泰伸・竹島大祐

柱島群島ライブラリー 2

端島と黒島

平成 29 年 3 月 31 日発行

執筆・編集 藤田慎一(文化財保護課)

発行 山口県岩国市横山二丁目7-19

岩国市教育委員会(文化財保護課)

印刷 大村印刷株式会社